

幼稚園におけるテレビ視聴に関する研究(2)

—絵本とビデオテープに対する保育科学生の捉え方—

橋爪千恵子

(常葉学園短期大学)

1 はじめに

本研究は昨年の研究(幼稚園におけるテレビ視聴の実態)に続くものである。昨年の研究から見えてきたことは次のとおりである。①教育課程にテレビ視聴の位置づけがなされている幼稚園がほとんどない。②テレビ番組やビデオテープ(以下「ビデオ」という)に対する保育者の教材研究が足りない。③保育者が絵本や紙芝居を読み聞かせる代用としてのビデオの使用がみられる。④テレビ視聴の有無や利用の仕方は保育者の保育観に大きく左右される。

そこで、将来保育者になろうとしている保育科の学生達が、保育環境・保育教材としてのテレビ視聴(筆者は、幼稚園での幼児のテレビ視聴を保育環境・保育教材の一つと捉える)をどのように捉えているのかを明らかにし、更に今後の保育者養成に生かそうと考えるものである。

2 研究方法

テレビ視聴のうち、上記の③の利用に対する学生の捉え方を探るために、次のような実験を行なった。

【実験】1994年10月18日から21日にかけて、本学保育科の学生 2年生 約80名ずつに、2種類の絵本とそのビデオを視聴させる実験を3回行なった(延べ人数479名)。絵本とそのビデオについて「児童文化財として両者を比較した場合」と「保育教材として両者を比較した場合」についての意見を書かせ比較検討する。

【実験材料】すてきな三にんぐみ(トミー・アンゲラ作 偕成社)、かいじゅうたちのいるところ(モーリス・センダック作 富山房)、フレデリック(レオ・レオニ作 好学社)、パーシーとこうずい(ウィルバート・オードリー作 ボプラ社)、はろるとまぼうのくにへ(クロケット・ジョンソン作 文化出版局)くまのコールテンくん(ドン・フリーマン作 偕成社)の各絵本とそのビデオテープ(すべてヤマハ・ビデオ・ライブラリー発行の世界絵本箱)

3 結果と考察

回答を上記の2項目について分析し、強いて「絵本派」「ビデオ派」に分類してみた。この2派に入れ難いものは「どちらともいえない」或は「両方利用派」とした。結果は表1~2のとおりである。

表1 児童文化財としての比較 単位:人(%)

区 分	絵本派	ビデオテープ派	どちらともいえない	計
はろるとまぼうのくにへ	20 (24.4)	42 (51.2)	20 (24.4)	82 (100)
パーシーとこうずい	13 (15.9)	56 (68.2)	13 (15.9)	82 (100)
かいじゅうたちのいるところ	43 (57.3)	17 (22.7)	15 (20.0)	75 (100)
くまのコールテンくん	30 (38.0)	33 (41.8)	16 (20.2)	79 (100)
フレデリック	31 (38.8)	24 (30.0)	25 (31.2)	80 (100)
すてきな三にんぐみ	26 (32.1)	31 (38.3)	24 (29.6)	81 (100)
計	163 (34.0)	203 (42.4)	113 (23.6)	479 (100)

表2 保育教材としての比較 単位:人(%)

区 分	絵本派	ビデオテープ派	両方利用派	計
はろるとまぼうのくにへ	51 (62.2)	4 (4.9)	27 (32.9)	82 (100)
パーシーとこうずい	25 (30.5)	23 (28.0)	34 (41.5)	82 (100)
かいじゅうたちのいるところ	43 (57.3)	3 (4.0)	29 (38.7)	75 (100)
くまのコールテンくん	32 (40.5)	14 (17.7)	33 (41.8)	79 (100)
フレデリック	47 (58.8)	10 (12.5)	23 (28.7)	80 (100)
すてきな三にんぐみ	50 (61.7)	4 (4.9)	27 (33.4)	81 (100)
計	248 (51.8)	58 (12.1)	173 (36.1)	479 (100)

2種類の文化財(絵本とビデオ)を比較検討することについては、賛否両論あると思う。各々はそれぞれ固有の特徴(長所と短所という言い方が許されるとしたら)長所と短所を併せもつものであり、比較することは不可能である、或は無意味であるという意見もある。しかし、現実には保育の現場で両者が利用されている以上、各々の特徴について改めて比較検討することは、保育の質を問う意味からも必要であろう。また、ここでは保育者が保育教材として利用する場合についての比較検討も取り上げ、子どもと保育教材と保育者という関係からの考察も試みたい。

(1) 児童文化財としての比較

この側面から光を当ててみると、全体の傾向としてはビデオがやや優勢である(表1)。特に作品「はろるとまぼうのくにへ」と「パーシーとこうずい」でその傾向が著しい。被験者の意見には「クレヨンで絵を描いている過程がわかりやすい」「動きがあるので楽しい」(以上「はろるとまぼうのくにへ」)、「機関車の顔の表情が変化するので親しみやすい」、「動きがあることによりストーリーが理解しやすい」(以上「パーシーとこうずい」)などというものが多かった。これらの意見をまとめると、この2作品はストーリーの展開が特に動的であること、そしてその動きがこの作品の生命であるために、ビデオの方が作品の持つお

もしろさ、楽しさが視聴者に伝わりやすいと捉えた被験者が多かったということであろう。

一方、絵本の方が優位なのは「かいじゅうたちのいるところ」と「フレデリック」である。これらについては「絵が良いので絵を見ているだけでいろいろなイメージを抱くことができる」「絵本だと動かないのでかいじゅうの動きや声などを自由に想像することができる」（以上「かいじゅうたちのいるところ」）「絵の素晴らしさをじっくり味わいたい」「各場面（1ページごとの絵）が心に残り、内容を深く考えられる」「絵を見ながらイメージを膨らめられる」（以上「フレデリック」）という意見が多くみられた。つまり、絵本の命ともいえる「絵」が芸術性が高く、文章に呼応して十分に表現していれば、文章を耳で聴くことにより、本来動かない絵からも動きを十分に想像すること（しかも、一人々がその人なりに）ができるということであろう。「おとなは文字を読むが、子どもは絵を読む」と言われているが、絵本の中で絵の果たす役割がいかに重要であるかを裏づけるものといえよう。

(2) 保育教材としての比較

これは「自分が保育者なら両者を教材としてどのように捉え利用したいか」という面から光を当てたものである。表2 からわかるように全体では「絵本派」が最も多い（51.8%）。個々の作品でみると、「はろるどまぼうのくにへ」「かいじゅうたちのいるところ」「フレデリック」「すてきな三にんぐみ」を視聴した被験者が、教材としては絵本の方を圧倒的に支持していることがわかる。「はろるどまぼうのくにへ」では「教材として考えると、ビデオでは子どもたち全員が同じイメージをもってしまうのに対して絵本では動きがない分想像する範囲が広いから子どもの個性が出て良い」「絵本なら読み聞かせながら保育者が子どもの反応やことばを聞き取り、想像を膨らめてやるなど子どもとのコミュニケーションをとりやすい」などの意見がある。「かいじゅうたちのいるところ」と「フレデリック」は(1)でも絵本の支持が多かったものだがこの面での支持理由に「子どもはおとなが思いもしないようなことを想像するし考え出す。それは絵本の影響がとても強いと思う。自分も幼児期に読んでもらった絵本はよく覚えている。強い印象を受けた絵本やお話は、成長した今でも心に残っている」「ビデオは見ている時は楽しいが流れていってしまう感じで、終わったあとに残るものがないということを今日の実験で強く実感した」という回答もあった。特に「すてきな三にんぐみ」のビデオは「ナレーターの声や口ずさむ効果音が愉快なため、それらにつられていつのまにか

話が終ってしまったように思う」という内容の回答が目だった。つまり、効果音の「楽しませる」という効果が強過ぎるために、かえって「視聴者がストーリーを追いつながら思考する」という行為を奪ってしまうのである。また、被験者の回答に共通してあげられているのは「子どもたちの家庭でのテレビ視聴の多さ」、及びビデオの「テンポの速さ」と「一方通行性」である。このことを指摘した多くの被験者が、「絵本は子どもの様子を見ながら子どもに合った速さで読めるし、子どもと言葉をやりとりしながら楽しむことができる」という主旨の意見を述べている。ビデオでは、子どもと保育教材という関係が強く保育者不在の観が否めないが、絵本の読み聞かせでは、子どもと保育教材の間に介在する保育者の役割が大きく関わっていることを指摘している。このことが幼稚園での保育教材として考えた場合、絵本がビデオに比して高い支持を得た最も大きな要因であろう。一方、両者を利用したいという意見（36.1%）には「ビデオを利用するのは、絵本を読み聞かせる代用としてではなく、絵本や写真だけでは子どもに十分に伝えられないものを見せたい場合に」など、各々の児童文化財の特徴を生かした利用に關しての意見が多い。

4 結論

被験者の回答は自分の見た絵本・ビデオのみで捉えたものであるので、一般論、或は客観的な結果とはいえないかもしれない。しかし、絵本とビデオに対する保育科の学生の捉え方、及び作品によって両者の捉え方が異なるということの一例を示すことができたのではないかと思う。

本研究から、学生達は児童文化財の面から光を当てた場合は、「子どもの立場」「子ども時代」にもどって「見る（聞く）」という行為をし、「おもしろさ」「楽しさ」という観点で作品を比較しているのに対し、保育教材の面からのそれでは、自分を「保育者の立場」に置き、「子どもの発達、教育」という観点から比較検討していることがうかがわれ興味深い。また、自分の幼児期を思い起こしたり、実習での体験を踏まえて他の児童文化財にまで言及している回答も多くみられた。これは被験者が2年生であり学内での理論の学習に加えて、複数の実習を体験しているからでもあろう。

保育者養成の面からは、学生に、多くの子どもと関わり子どもの生の実態をつかむ経験、色々な文化財に接して広い視野から考察する時間を与えることが必要であると考えられる。